

平成19年度海外派遣研修

「ネパールにおけるC B Rから地域での障害児対策について学ぶ」

作業療法学科 助教 来間 寿史

○期 間 平成19年 8月 17日 ～ 9月 5日 (20日間)

○研修先 ネパール カトマンズ市 バラジュ村C B Rサイト、カスキ郡 ポカラ周辺C B Rサイト

1. 研修の目的

医療専門家が極端に少ない開発途上国においては障害児問題への対策としてC B R (Community Based Rehabilitation: 地域に根ざしたリハビリテーション) が多く採用されている。茨城県においても小児専門の作業療法士は不足しており、障害児に対する作業療法士の支援は医療機関での治療介入よりも、地域生活の場である学校で教員を支援する形で効率的に行われることが期待されている。今回の海外研修では、ネパールで開催されるC B Rセミナー・ワークショップに参加すること、ネパール国内のC B Rサイトで人的物的資源を生かした障害児支援を視察することを目的とした。

2. 研修の概要

＜ネパールのリハビリテーション事情＞

ネパールの医学的リハビリテーション事情として、筆者が知り得た情報ではO Tは国内に4名いるに過ぎなかった。国内にO T養成校はなく、彼らはインドで教育を受けて帰ってきたのである。O T・P Tのほとんどが首都で勤務しており、地方においてはリハビリテーションはおろか病院すらほとんどない状況であった。一方、約20年前に導入されたC B Rは、現在では海外からの支援金により運営される多くのN G Oによってネパールのほぼ全域で展開されるまでに拡大していた。

＜ネパールのC B R事情＞

C B Rサイトではトレーニングを受けたC B Rワーカーがいた。C B Rワーカーは地域から選出され、初めは全くの素人である。N G Oによる研修を受けた後に担当地域内を巡回し、障害児の発見と簡単な医学的リハビリテーションを行う。しかし、地域での役割はこれにとどまらない。彼らは障害児を支援するにあたり“教育、権利獲得とエンパワーメント、リハビリテーション、生計の維持”という4つのテーマを持っていた。週に1回カウンセリングセッションを村で開いたり、障害児理解と権利獲得につなげる『Child Club』や貧しい障害児家族を含め村の経済互助活動を行う『Self Support Fund Group』を組織したり、これから生まれてくる子どもたちが障害を持たないよう衛生管理や栄養管理を若者に教育したりと、地域に根ざした包括的な障害児支援を行っていた。近年の成果として、学校に通えるようになった障害児の増加と女性クライアントの増加が報告されており、このC B Rプログラムが教育行政を動かし障害児や女性の権利を認める地域社会の態度にも変化をもたらしていた。



＜ＣＢＲセミナー・ワークショップ＞

バラジュ村ＣＢＲを運営するＮＧＯラルパテ・ネパール主催の本セミナー・ワークショップには、カトマンズ周辺地域からＣＢＲワーカー、ＰＴ、ＯＴ、鍼灸師、障害児の親、日本人青年海外協力隊ＰＴＯＴらが集まり、総勢約６０人の参加者で行われた。

セミナーでは、障害児へのリハビリテーションを保障していく上での障壁は何なのかが議論され、障害児の家庭が貧困、病院まで遠いこと、親の意識が低いことなど当事者に関する問題が多く挙げられる一方で、リハビリテーション関連職間のネットワークがないことも問題点として参加者自身の責任が認識された。ネパールではＣＢＲに関わるＰＴ・ＯＴが少なく、今回の参加者の多くがこのセミナーを機にお互いを知り、地域での障害児支援のためにＣＢＲサイトへ出向くことを始めたいと語っていた。

ワークショップでは脳性麻痺児が座れる特製椅子のデザインから作成までをグループワークで行った。参加者の中には一人も特製椅子を作った経験者はいなく、非常に熱心に取り組んでいた。協力が得られたバラジュ村の脳性麻痺児がワークショップ会場に集まり、担当する子どもの臨床像を確認しながら、各グループ採寸、デザイン、作成を２日間かけて行った。ワークショップ終了後、参加者からはネパールではこのような研修がまったくないので、日本からの技術支援が声高に求められた。

筆者は、セミナーにてマレーシアにおけるＣＢＲ活動の経験を報告し、ワークショップでは日本での臨床経験から得た椅子作成上の技術を参加者に伝えることができた。



３．まとめ

ネパールのＣＢＲワーカーは以下のことを行っていた。

- ・ 担当地域を巡回し、障害児の早期発見、基礎的なリハビリテーションを指導する。
- ・ 村で週に１回カウンセリングセッションを持つ。
- ・ 障害児理解と権利獲得につなげる「Child Club」を健常児に対し組織運営する。
- ・ 数家族で経済互助活動を行う「Self Support Fund Group」を組織する。
- ・ 統合教育を推進する。
- ・ 都市部の情報に目を向ける「Child Journalism Training」を健常児に対して企画する。など

今回の海外研修で、医療専門家が少ない地域においてリハビリテーションへのアクセスを改善するために、地域の人的資源を活用することと、専門職間の繋がりを密にし生活地域ごとに障害児支援への責任をそれぞれが認識することの必要性を学んだ。

先進国である日本の地域リハビリテーションが開発途上国のＣＢＲから学ぶべき点は数多くある。日本で始まったばかりである学校における作業療法士の役割は、地域の人的資源である教員やボランティアや保護者を支援することであり、ＣＢＲ支援と考えることができる。しかしこの役割を担うにあたっては高いリーダーシップと柔軟な思考が求められ、上記ＣＢＲワーカーの実践は非常に参考となるものである。本学作業療学科にはＣＢＲを卒業研究のテーマとする学生や、開発途上国支援に興味を持つ学生が多い。この海外研修で学んだことを学生に伝えるとともに、一人でも多く実際に開発途上国のＣＢＲにふれ学べるよう支援していきたい。

ＣＢＲ情報： KOPILA-Nepal www.kopilanepal.org.np

Hospital and Rehabilitation Center for Disabled Children www.hrdcnepal.org